

「親疎関係」が与える「直接的断り」への影響

The Effects of Degrees of Intimacy on Direct Refusals

権 英 秀

KWON Young-Su

Abstract

This paper discusses what kind of direct expressions are used, in the case of refusal-conversation, according to the relative degree of intimacy between participants.

1. Towards their interlocutors with higher degree of intimacy, Japanese university students mostly use the refusal structure of ‘～ + direct refusal’ and try to save their own face, while in using the same refusal structure towards the interlocutors with lower intimacy they often try to preserve their face.
2. Korean university students use the refusal structure of ‘direct refusal + ～’ in low frequency.
3. Japanese university students often use direct refusal expressions which contain clause-final modal elements ‘*noda*.’ This tendency is higher when refusers attempt to preserve their own positive face.
4. Korean university students use direct refusal expressions containing the modal elements which are equivalent to ‘*kedo*’, ‘*keredomo*’, ‘*desu*’, and ‘*masu*’ in Japanese. This tendency is stronger when refusers work on their own positive face.

Keywords : 直接的断り、ポライトネス、親疎関係

0. はじめに

断る側は、一般的に相手（依頼者・要求者など）の意図に応じず、断る側の領域（「自由にいたい」のような気持ち）を守る「断り」発話行為¹を遂行・成功させるために、依頼者との諸関係である「親疎関係、年齢差、発話内容（依頼・要求などの内容）」などを慎重に考慮したり、相手（依頼者・要求者など）との人間関係を考慮したりすることによって、断った後のリスクをできるだけ最小限にする最大限の「断り」表現を行うと思う。

「断り」表現は、断る側のnegative face²に働きかける部分（「断り」の意味が直接入っている箇所、「直接的断り」にあたる）と「直接的断り」以外の「（間接的な）断り」（以下、「間接的断り」との組み合わせで構成されている（Beebe et al. 1990、72-73）。「直接的断り」は相手の意図に沿えない気持ちをあからさまに伝える表現であり、相手の面子をつぶしやすく、互いの人間関係にも重要な影響を与える。そのために、断る側は依頼者側の面子を考慮しながら間接的に断る場合が多い。したがって、「断り」の先行研究では、「直接的断り」以外の「間接的断り」に焦点をおいたものが多い。

しかし、本稿では、日・韓両言語の「断り」表現を対象に、「断り」の意を直接に表す「直接的断り」に焦点をおき、断る側と依頼者の「親疎関係」によって現れる「直接的断り」の言語構成と言語表現に関する異同を考察する。さらに権(2009)で行った「年齢差」が「断り」の軸の場合に現れる「直接的断り」とも比較して、「親疎関係」と「年齢差」が与える「断り」への影響および度合いについても調べたいと思う。

1. データ調査

- ① 調査期間：2007年9月から2008年3月にわたって調査を実施した。
- ② 調査対象者：日本人50人と韓国人50人を対象にした。
- ③ 調査方法：「ビデオ録画によるロールプレー調査」

ロールプレー（role play）とは、話し手（働きかける人）が聞き手（調査対象者）と対話などを主導し働きかけながら、ある置かれた状況の下で会話の参加者がどのような会話をするかを録音、或いはビデオなどで録画する調査である。そのために既存の調査（アンケートなど）より、自然な会話の分析が可能である。さらにMiriam & Bodman (1993：65-74)によれば、turn-takingや同じ情報の繰り返し、同じ意味公式の繰り返しが見られるとも指摘されている長所の反面、ロールプレーはアンケートのように多くのデータを集めるには限度がある。

今回ロールプレーを働きかけるのは著者（韓国人であり、韓国人を担当）と日本人（日本人を担当）2人で行った。働きかける人は十分な練習（先輩役、後輩役の演技、予想外のハプニングへの対処）を行い、予備調査を経て本調査に臨むことにした。本調査では、各場面に与えられた役にふさわしい手振りやトーンで台詞のとおり演技してもらった。

そして調査対象者は、ジェンダーの影響も考えて男女比率を50：50にした。調査対象者から調査の趣旨への理解（「断り」研究）と許可（ビデオ録画）を得た上で、働きかける人と調査対象者との2人組で調査を行った。まず、調査対象者が調査の全般の説明について十分理解したか聞いた後、理解したというサインがあるまで、調査のやり方（調査対象者が置かれている各場面で、実際断る時に行いそうな自然な会話をする事、ジェ

スチャーなど)を説明した。その後、調査対象者がリラックスした状況の下で、各場面のロールプレーをビデオ録画した。そして各場面が終わった後に、録画をチェックしながらインタビューを実施した。インタビューでは、断った時の調査対象者の意図や調査に関することなどを聞き込みながら、前場面で行われた「断り」を忘れるように時間の余裕を設けた。

表1) ロールプレーの概要

| 日本人グループ | 韓国人グループ |
|-------------|-------------|
| 働きかける人 | 働きかける人 |
| 要求↓ ↑断り | 要求↓ ↑断り |
| 男性25人：女性25人 | 男性25人：女性25人 |
| 調査対象者50人 | 調査対象者50人 |

④ 場面の設定：今回、ロールプレーの内容は「お金の貸し借り」と「アンケート調査」³であり、「親疎関係」による「断り」の異同を考察するために、各内容は「親しい人」と「親しくない人」⁴から依頼されるように設定した。

⑤ 文字化の方法：

ビデオ録画によって収集したデータの文字化は、研究の目的に応じて一部独自の記号を筆者が付け加えた。収集したデータは筆者が文字化をし、分析を行った。ただし、正確に聞き取れない部分は調査対象者に聞かせて確認作業を行った。そして調査に参加していない日本人と韓国人に検定⁵を依頼した。

表2) 文字化の記号

| |
|--|
| <p>H：働きかける人を指す。</p> <p>J：・日本人の調査対象者を指す。(Kは韓国人を指す)</p> <p>・「断り」の発話は太文字で表す。</p> <p>イントネーション：通常よりイントネーションに変化が見られ、上昇「↑」、下降「↓」とする。</p> <p>・・・：・言いよどみや、間を表す。「・」の数は推定される拍数の長さである。</p> |
|--|

・発話導入の呼吸段落

例：・・・は4秒ぐらい「言いよどみ」或いは「間」がある。

例：すみません。ちょっとその日は。

(「すみません」の発話導入の前に呼吸をする。)

.....：調査対象者が通常より早く話すことを表す。

～：長音、！：驚き、？：疑問

プライバシーの保護のために調査対象者の名前は00に記する。

2. ポライトネス (politeness)

近年、ポライトネスに関して最も大きな影響を持っているのはB&L(1987)のポライトネス理論である。B&LはGoffman(1976)が提唱した「フェイス (face)」の概念を利用して、2つの「フェイス」であるpositive face (積極的フェイス) とnegative face (消極的フェイス) に分けて分析している。B&Lの2つのフェイスは次のようなものである。宇佐美(2002)の考え方も同時にまとめて下記に示す。

表3) フェイスの定義 (①B&Lの定義 (著者訳)、②宇佐美の定義)

① negative face : the want of every 'competent adult member' that his actions be unimpeded by others.

(消極的フェイス：自分の行動が他人に妨げられたくないという大人の欲求)

② 他者に邪魔されたり、立ち入られたくない、つまり、「他者と一定の距離を起きたい」、ここから先へは踏み込んでほしくないという「マイナス方向に関わる欲求」である。

① positive face : the want of every member that his wants be desirable to at least some others.

(積極的フェイス：自分の欲求が少なくとも何人かの人にとって望ましいものであって欲しいという構成員の欲求。)

② 他者に理解されたい、好かれたい、仲間だとみなされたい、つまり、「他者に近づきたい」というプラス方向への欲求である。

このようなフェイスに対して、「相手のフェイスを脅かすか否か」ということを発話行為の枠組みと、「ある種の行為は本質的にフェイスを脅かす恐れがあるため、それを和らげる手段が必要である」というポライトネスの理論に基づいて研究されている。つまり、人間は発話行為において、相手のpositive faceや、negative faceを傷つけたり、破ることがあり、逆に自分のpositive faceや、negative faceを傷つけたり、破ることもあるとされる。

このようなフェイスを傷つける可能性が人間のコミュニケーションには潜在的にあるのだと指摘されている。そのため、相手または自分のフェイスを脅かす行動(Face-Threatening Acts: FTA)の可能性を無くすために、会話の参加者は何だかのストラテジー (strategies)を使用するのである。このストラテジーは話し手の選択であり、会話の場でさまざまな要素(相手・会話内容・置かれた状況など)によって判断される。

しかし、日本語と韓国語のように、社会的・文化的規範による言語選択(敬語体系)の制約のある言語には、欧米言語(英語、フランス語等々)と違ってB&Lのポライトネスは当てはまらず、B&Lのポライトネスが普遍性を目指していながらも成功していないと批判されている(Fraser & Nolen1981、Matsumoto1988、宇佐美1993、元2005)。

したがって、本稿では「B&Lのポライトネス」に加えて「わきまへのポライトネス」も参考しながら考察する。井出他(1986)は日本語の言語形式の1つである敬語をポライトネスからはかる際、「気楽な⇔改まった」の分類基準を用いて研究している。そして元(2005: 30-35)も井出らの「わきまへのポライトネス」を参考にしながらも「気楽な」と「改まった」の分類基準が反対の意をなしているという保証はないと指摘し、「気楽な⇔改まった」を「改まっていない⇔改まった」という「改まりの軸」により「断り」に現れるポライトネスを構築し、分析している。相手に「断り」の意を直接的に表す「直接的断り」は、相手のフェイスをはじめ、断る側のフェイスまで損傷する可能性が高いストラテジーである。そのために、断る側は複数のストラテジーを工夫して、フェイスのリスクを最小限にしようとする。この際、断る側はストラテジーを念頭にさまざまな言語形式によって相手に「断り」を伝えるであろう。

本稿では、「わきまへのポライトネス」として「やわらかい表現(配慮表現⁸)⇔かたい表現」の軸から「直接的断り」を観察する。元(2003: 160)は「直接的断り」における日本語の「ノダ」文と韓国語の「짓 갈다(～ようだ・そうだ)」文に注目して、それらのつかない文と比べ、より配慮した表現であり、間接的かつ親近感を強く示す表現であるという印象が共通していると述べている。「直接的断り」における「常体文」はポライトネスの度合いがほぼゼロに近いと思われる。しかし、「常体文⁹」に比べて、「ノダ」文は表現がやわらかく、モダリティ¹⁰によって表現が間接的になったり、ポライトネスの度合いをより明らかにしたりすることができる。したがって、「モダリティのないかたい表現」と「モダリティのあるやわらかい表現、および副詞によるやわらかい表現」を対象に考察する。

表4) 「直接的断り」における「やわらかい表現」の下位分類¹¹

| 日本語 | 韓国語 | 例 (常体文→やわらかい表現) ¹² |
|-------------------------------|-----------------------------|---|
| ちょっと | 좀, 조금 | 無理だ→ちょっと無理だ。 싫다→좀 싫습니다. (いやだ) → (ちょっといやです) |
| 可能表現 | ㄹ (을) 수 없다, 못~ | 貸す→貸せない。 주다→줄 수 없어요. (貸す) → (貸すことができません) |
| のだ | 겠 ¹³ , ㄹ (을) 것이다 | できない→ちょっとできないんです。 안 되다→안 되겠다. (だめだ) → (だめなんだ) |
| そうだ ¹⁴ | ㄹ (을) 것 같다 | 힘들다→좀 힘들 것 같아요. (厳しい) → (ちょっと厳しそうです) |
| 丁寧語 | ㅂ니다 (습니다), 아요 (어요・여요) | いやだ→いやです。 안 되다→안 돼요 ¹⁵ . (だめだ) → (だめです) |
| と思う ¹⁶ | 인 줄 알다, (이) 라고 생각한다 | できない→できないと思います ¹⁷ 。 |
| けれども・ けど ¹⁸ 、が | ㄹ (은) /는데, 지만 (~만) | 無理だ→無理だけど。 안 되다→안 되는데. (だめだ) → (だめだけど) |
| 終助詞 ¹⁹ (よ、よね、ね) | 네 | だめだ→ちょっとだめだね。 빌려 주다→빌려 줄 수가 없네. (貸す) → (貸すことができないね) |

3. 「親疎関係」から見た「直接的断りのみ²⁰」

日本語と韓国語において、「断り」の意図を直接に相手に伝える「直接的断り」は単独で使用される場合、「親しい相手」と「親しくない相手」に対して、①どのような補助的ストラテジー²¹が現れるのか、②どのような言語表現が用いられるのかを比較する。

表5) 日本語と韓国語の「直接的断り」に現れる補助的ストラテジー

| | 親疎関係 | 「直接的断り」 | | 「感嘆詞」 | 「呼称」 | 「笑い」 |
|-----|------|----------------------------|---|-------|------|------|
| 日本語 | 親 | 49回 (31.1% ²²) | + | 27回 | 1回 | 4回 |
| | 疎 | 32回 (21.3%) | | 26回 | 0回 | 0回 |
| 韓国語 | 親 | 7回 (7.6%) | | 5回 | 1回 | 1回 |
| | 疎 | 6回 (8.7%) | | 4回 | 0回 | 0回 |

(親：親しい人からの要求、疎：親しくない人からの要求、以下同様)

「親疎関係」が「断り」の変数の場合、日本語と韓国語では補助的ストラテジーである「感嘆詞」が主に使用されている共通点がある。しかし、両言語の間では異なる傾向も見られる²³。日本語は「親しい相手」に対して「直接的断りのみ」を多く使用する傾向がある。これは権(2006、2007)のように、家族以外に親しみが絡まれているウチⅡ（本論文では親しいグループ）とソト（本論文では親しくないグループ）の間で、親しいグループより親しくないグループにより気を配る傾向を指摘しているところである²⁴。他にも任(2003：71)は親疎関係において、日本語の場合は親しみのある「ウチ（本論文では親しいグループ）」に「結論」の使用頻度が高いと述べている。そして森山(1990：62)も日本語では親しい同級生に対して、「嫌型」が多いと指摘している²⁵。

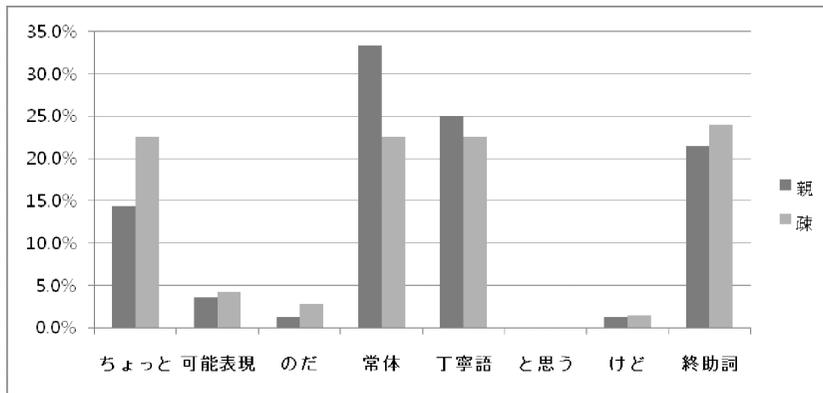
したがって、日本人相手との人間関係から感じる親しみが「断り」に影響を与える場合、親しい関係から感じる負担度は、親しくない関係から感じる負担度より小さく、すでに結ばれている人間関係を保全するより、「親しくない相手」との今後の人間関係を重く感じて、「断り」を考慮することが分かる。

このような「直接的断りのみ」の場合、次の言語表現が表れている。

表6) ① 日本語の「直接的断りのみ」²⁶

| | ちょっと | 可能表現 | のだ | 常体 | 丁寧語 | と思う | けど | 終助詞 | 合計 |
|---|-------|------|------|-------|-------|-----|------|-------|------|
| 親 | 12回 | 3回 | 1回 | 28回 | 21回 | 0回 | 1回 | 18回 | 49回 |
| | 14.3% | 3.6% | 1.2% | 33.3% | 25% | ・ | 1.2% | 21.4% | 100% |
| 疎 | 16回 | 3回 | 2回 | 16回 | 16回 | 0回 | 1回 | 17回 | 32回 |
| | 22.5% | 4.2% | 2.8% | 22.5% | 22.5% | ・ | 1.4% | 23.9% | 100% |

② グラフ



権(2009)は、「年齢差」の変数による日本語の「直接的断りのみ」において、「年上の人」と「年下の人」に共通に「ちょっと」と「終助詞」を使用していたと指摘している。しかし、本研究では「親疎関係」が変数になると、日本語では「ちょっと」、「終助詞」以外にも、「可能表現」、「常体」、「丁寧語」など、より幅広く「わきまへのポライトネス」²⁷として使用されていることが分かる。

さらに「親疎関係」から詳しくみると、「親しくない人」からより、「親しい人」からの「要求」に対して、日本語では「常体」、「丁寧語」が主に多く使用されている。崔平(2002: 12-13)は親しいグループに対する「直接的断り」では、「常体」と「丁寧語」を用いて、「年上の人」に「丁寧語」、「年下の人」に「常体」を使用すると述べている。つまり、日本人は親しみのある「年齢差」においては、「常体」と「丁寧語」の使い分けによって、「親しい年上の人」と「親しい年下の人」に対する言語形式を定型化していると指摘している。

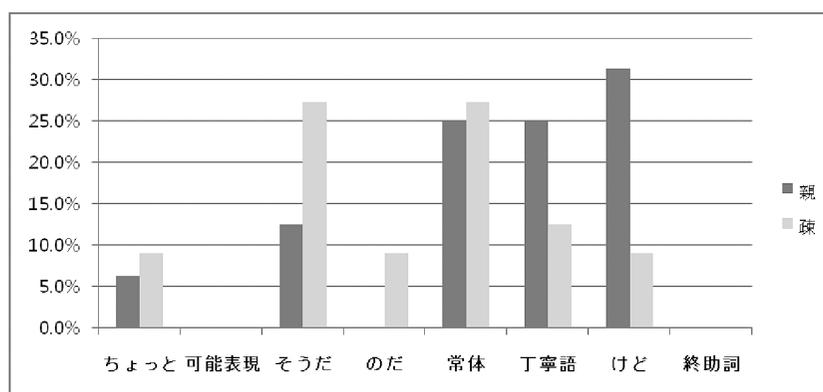
一方、「親しくない人」からの「要求」に対しては、「ちょっと」、「のだ」、「終助詞」が多く使用されている。これは、「年下の人」に対して「わきまへのポライトネス」の「終助詞」を主に使用していた「年齢差」の場合と比べて(権2009)、「親しくない人」からの要求では「終助詞」以外にも、「ちょっと」、「のだ」が使用されており、「年下の人」から感じる負担度より重く感じていると言えよう。なぜなら、「わきまへのポライトネス」の言語形式(「ちょっと」、「のだ」)は、比較的重い負担になる「年上の人」に対して使用されたものが、この場合親しくない人に対する「わきまへのポライトネス」として使用されているからである。つまり、日本語では「親しくない人」から感じる負担度は、「年下の人」から感じる負担度より一層重く感じて気を配るために、「直接的断りのみ」に使用する「やわらかい表現(配慮表現)」を複数組み合わせることで表現することが分かる。

次は韓国語での「直接的断りのみ」に現れる「断り」の言語表現を考察する。

表7) ① 韓国語の「直接的断りのみ」

| | ちょっと | 可能表現 | そうだ | のだ | 常体 | 丁寧語 | けど | 終助詞 | 合計 |
|---|------------|---------|-------------|----------|-------------|-------------|-------------|---------|------------|
| 親 | 1回 6.3% | 0回 ・ | 2回 12.5% | 0回 ・ | 4回 25% | 4回 25% | 5回 31.3% | 0回 ・ | 8回 100% |
| 疎 | 1回 9% | 0回 ・ | 3回 27.3% | 1回 9% | 3回 27.3% | 2回 12.5% | 1 9% | 0回 ・ | 5回 100% |

② グラフ



権（2009）は、「年齢差」が変数の場合に現れる韓国語の「直接的断りのみ」において、相手が「年上」と「年下」の人に対して、共通に「そうだ」、「丁寧語」、「けど」が使用されていたと指摘している。しかし「親疎関係」が変数になると、韓国語では「そうだ」、「丁寧語」、「けど」以外にも、「ちょっと」、「常体」など、日本語と同じく、より幅広い「わかまへのポライトネス」が使用されていることが分かる²⁸。

「親疎関係」から詳しくみると、「親しくない人」からより、「親しい人」からの「要求」に対して、韓国語では、「丁寧語」、「けど」が主に多く使用されている。これは「親しい人」に対して「丁寧語」、「常体」を多く使用した日本語と異なって、韓国語では「けど」という逆説接続助詞を使用することから、「直接的断り」の断定を控えて相手に「断り」の意を分かってもらおうとすることが見られる。

例1) 親しい先輩の「お金の貸し借り」－親しい後輩の「断り」

H: 저기 미안한데 지금 회비를 내야 하거든, 오만원정도 있으면 좀 빌려주지 않을까?
(あのう、悪いんだけど、今会費を払わなければいけないから、5万円ぐらいあれば、ちょっと貸してくれない?)

K: ... 아~, 안 될 것 같은데요, 5만원.
(... 아~,できなそうですけど、5万ウォン。)

例2) 親しい後輩の「アンケート調査」－親しい先輩の「断り」

H: 과제로 지금 대학생들의 학교생활에 대해서 앙케이트를 모집하고 있거든요, 시간 있으면 앙케이트에 대답 좀 해주세요.
(課題で、今大学生の生活についてアンケート調査をとっているんですけど。時間あれば答えてください。)

K: 아~이 지금은 안 되는데, (아~이、今はできないけど。)

例3) 親しい先輩の「アンケート調査」－親しい後輩の「断り」

H: 과제로 지금 대학생들의 학교생활에 대해서 앙케이트를 모집하고 있거든요, 시간 있으면 앙케이트에 대답 좀 해줘.
(課題で、今大学生の生活についてアンケート調査をとっているんだけど。時間あれば答えてくれない。)

K: ... 네, ↓ 싫은데. (... 넝, いやだけど。)

例1)～例3)の「直接的断りのみ」では、逆説接続助詞「けど」が用いられている。この逆説接続助詞の使用によって、「だめです」、「いやだ」の表現を和らげて、断る側の「断り」の意を相手の要求者が分かってくれることを期待しているのである。さらにこのような逆説接続助詞が多く見られる韓国語について、任(2003: 38-59)は「ウチ」、「ソト」、「ヨソ」に区別は認められないが、パターン化されていると述べている。しかし、今回の調査ではデータ数は少ないが、親しいグループで比較的多く使用されていることが見られており、今度詳しく研究する余地があると思う。

上記の「親しい人」に対する「直接的断りのみ」と比べて、「親しくない人」からの「要求」に対する「直接的断り」では、表7)で分かるように、「ちょっと」、「そうだ」、「のだ」、「常体」が多く使用されていることが分かる。特に「ちょっと」、「そうだ」、「のだ」は「年

下の人」に対する「わきまえのポライトネス」として使用された言語形式である(権2009)。つまり、韓国語の「親しくないグループ」に対して使用する「直接的断りのみ」のポライトネスは、「年齢差」の「年上の人」から感じる負担度より重く感じていることが分かる。この理由は、「年下の人」より「年上の人」に対する「断り」に対して負担を重く感じており、「親しくない人」に対する「断り」と同じ「わきまえのポライトネス」が用いられているからである。ちなみにこの「年齢差」と「親疎関係」から感じる負担度の度合いの関係は、日本語と似たところである。

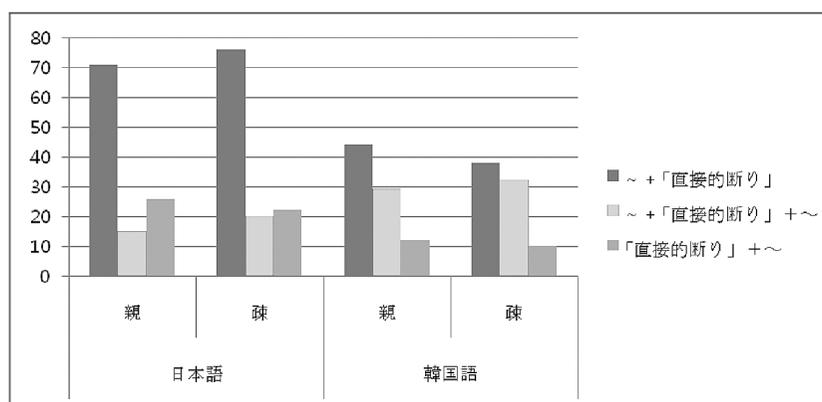
4. 「親疎関係」から見た「直接的断り」+「間接的断り」

「直接的断り」+「間接的断り」における「直接的断り」は、次のような位置に現れている。

表²⁹8) ① 「直接的断り」が現れる順番

| | 親疎関係 | ～+「直接的断り」 | ～+「直接的断り」+～ | 「直接的断り」+～ |
|-----|------|-----------|-------------|-----------|
| 日本語 | 親 | 71回 | 15回 | 26回 |
| | 疎 | 76回 | 20回 | 22回 |
| 韓国語 | 親 | 44回 | 29回 | 12回 |
| | 疎 | 38回 | 32回 | 10回 |

② グラフ



「親疎関係」が与える「直接的断り」への影響

権(2009)は「年齢差」が変数の場合、日本語と韓国語は、主に「～+「直接的断り」」の組み合わせを多く使用しており、その際「理由」を用いて断る側のpositive faceを初出に現していることが多いと指摘している。今回、「親疎関係」が変数の場合においても、両言語は主に「～+「直接的断り」」の組み合わせを多く使用しており、断る側のpositive faceをワン・クッションにしなが、ら、「直接的断り」の負担度（negative faceを守ることによるpositive faceの損傷）を考慮していることが分かる。

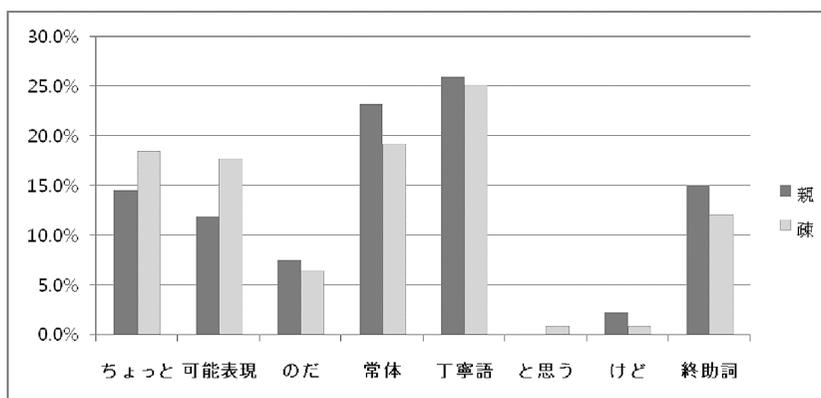
しかし、日本語と韓国語では、「～+「直接的断り」」の組み合わせ以外では異なる使用頻度を見せている。特に韓国語では「「直接的断り」+～」の組み合わせの使用頻度が低いことに注目したい。これは権(2009)でも見られた現象である。韓国語では日本語と異なって、「年上の人」に対して初出に「直接的断り」を言い出しなが、ら「断り」を行う使用頻度は少なかった。言い換えれば、負担度が高い相手であればあるほど、初出からは「断り」の意図を表さないという意味である。そのために、韓国語では負担度が高いほど、初出に断る側や相手（年上の人）のpositive faceを保持するストラテジーを持ち出した後に、「直接的断り」を使用することが分かる。したがって、「親疎関係」が変数になって行われる韓国語での「断り」では、「年齢差」が変数の場合に感じる負担度より、韓国人の感じる負担度は高く、「直接的断り」に多く影響を与えていると思われる。

次は相手との「親疎関係」が「断り」の変数になる場合、「直接的断り」+「間接的断り」における「直接的断り」の言語形式を詳しく見る。まず、日本語の「直接的断り」を考察する。

表9) ① 「直接的断り」+「間接的断り」における日本語の「直接的断り」

| | ちょっと | 可能表現 | のだ | 常体 | 丁寧語 | と思う | けど | 終助詞 |
|---|--------------|--------------|-------------|--------------|--------------|------------|------------|--------------|
| 親 | 33回 14.5% | 27回 11.8% | 17回 7.5% | 53回 23.2% | 59回 25.9% | 0回 ・ | 5回 2.2% | 34回 14.9% |
| 疎 | 49回 18.4% | 47回 17.6% | 17回 6.4% | 51回 19.1% | 67回 25.1% | 2回 0.8% | 2回 0.8% | 32回 12% |

② グラフ



「親疎関係」が「断り」の変数になると、日本語での「直接的断りのみ」の場合は、「親しい年上の人」に「丁寧語」、「親しい年下の人」に「常体」を使用しており、「親しくない人」に対しては、「ちょっと」、「のだ」、「終助詞」を多く使用して、「親疎関係」の与える「わきまへのポライトネス」が異なることが見られた。

しかし、「直接的断り」が「間接的断り」と組み合わせられた場合、日本語は親しくない相手に対する「断り」と比べて、親しい相手に対して断る側のフェイスを考察して、「のだ」、「常体」、「丁寧語」、「けど」、「終助詞」の言語形式を多く使用している。一方、親しくない相手に対しては、相手のpositive faceと「直接的断り」が組み合わせられることが多く、「ちょっと」、「可能表現」、「と思う」の言語使用が多く用いられている。

つまり、断る側のフェイスにおける「直接的断り」の「わきまへのポライトネス」においては「のだ」、「けど」、「終助詞」の使用が、相手のフェイスを配慮する場合は「可能表現」、「と思う」を使用するというように、相関関係が見られる。このようなフェイスと「直接的断り」の関連性は「年齢差」の場合も、断る側のpositive faceと相手のpositive faceを念頭におきながら、「年上の人」に「のだ」や「丁寧語」を用いた「直接的断り」を使用していた。

特に「のだ」は「positive face」と組み合わせる際に用いられる「わきまへのポライトネス」のパターンであるのかもしれない。

例4) 親しい先輩の「お金の貸し借り」－親しい後輩の「断り」

H: あもう、悪いんだけど、今会費を払わなければいけないから、5千円ぐらいあれば、ちょっと貸してくれない？

J : 5千円ですか。おれちょっと～お金ないんで、貸せないんですけど。すみません。

(「積極的陳述」 + 「理由」 + 「直接的断り」 + 「謝罪」)³⁰

例5) 親しい先輩の「お金の貸し借り」－親しい後輩の「断り」

H : あのう、悪いんだけど、今会費を払わなければいけないから、5千円ぐらいあれば、ちょっと貸してくれない？

J : す、すみません。ちょっと持って・なくて、貸せないんですけど。

(「謝罪」 + 「理由」 + 「直接的断り」)

上例のように「親しい年上の人」に対して、日本語では「理由」と「直接的断り」を多く組み合わせている。両例とも「断り」行為による断る側のpositive faceの損傷を防ぐために、「理由」を「直接的断り」の前においたワン・クッションの働きを利用している。その後、「直接的断り」を用いて断る側のnegative faceを守ろうとしている。この「直接的断り」を表すために、断る側は「のだ」の「わきまへのポライトネス」を用いて、伝えづらい「直接的断り」表現を相手に説明しているのである。したがって、日本語では「親しい人」や「年上の人」に対して、断る側のpositive faceを考慮しながら、「のだ」を用いて「直接的断り」を伝えたと、断る側のnegative faceによる自己イメージの損傷や、損傷の度合いを調節することができると思われる。

他に、日本語では「親しい人」に対しては、「丁寧語」、「けど」、「終助詞」も使用し、断る側のフェイスを念頭におきながら、「断り」の意を丁寧にやわらかい表現を工夫して説明しようとする傾向があると言える。

次は「親しくない人」に対する「断り」を見てみよう。

例6) 親しくない先輩の「アンケート調査」－親しくない後輩の「断り」

H : 課題で、今大学生の生活についてアンケート調査をとっているんだけど。時間あれば答えてくれない。

J : アアすみません。ちょっと今できないんです。

(「感嘆詞」 + 「謝罪」 + 「直接的断り」)

例7) 親しくない後輩の「お金の貸し借り」－親しくない先輩の「断り」

H: あ的那个、悪いんですけど、今会費を払わなければいけないんですよ。5千円ぐらいあれば、ちょっと貸してもらえませんか？

J: ・↓カハ、ごめんなさい。ちょっと今は～貸せないです。

(「感嘆詞」+「謝罪」+「直接的断り」)

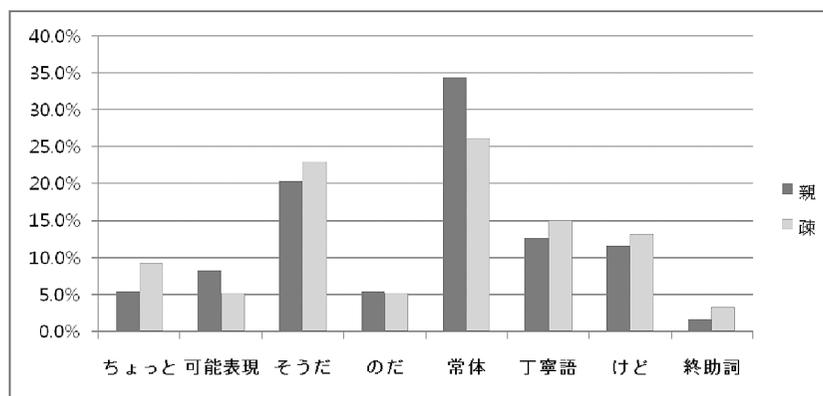
上の例は親しくない相手に対する「断り」である。日本語では「親しくない人」に対して、「謝罪」を用いて相手のpositive faceを考慮した後に、「ちょっと」、「可能表現」を用いながら「直接的断り」を行っている。これは親しくない相手が、わざわざ親しくない断る側にpositive faceを念頭に要求してきたことに対する断る側からの配慮であろう。つまり、断る側は自分のnegative faceに働きかける「直接的断り」に、相手を配慮した「わきままへのポライトネス」の言語形式を用いて表すと考えられる。

次は、相手との「親疎関係」が変数になる場合、「直接的断り」+「間接的断り」における韓国語での「直接的断り」の言語形式を詳しく見てみよう。

表10) ① 「直接的断り」+「間接的断り」における韓国語の「直接的断り」

| | ちょっと | 可能表現 | そうだ | のだ | 常体 | 丁寧語 | けど | 終助詞 |
|---|-------------|-------------|--------------|-------------|--------------|--------------|--------------|------------|
| 親 | 10回 5.5% | 15回 8.3% | 37回 20.4% | 10回 5.5% | 62回 34.3% | 23回 12.7% | 21回 11.6% | 3回 1.7% |
| 疎 | 14回 9.2% | 8回 5.2% | 35回 22.9% | 8回 5.2% | 40回 26.1% | 23回 15% | 20回 13.1% | 5回 3.3% |

② グラフ



「親疎関係」が「断り」の変数になると、韓国語では「直接的断りのみ」の場合、親しい相手に対しては「丁寧語」、「けど」を使用し、親しくない人に対しては「ちょっと」、「そうだ」、「常体」を多く使用して、「親疎関係」が影響する「わきまへのポライトネス」が異なることが見られた。

しかし、「直接的断り」が「間接的断り」と組み合わせられた場合、韓国語では、親しくない相手に対する「断り」と比べて、親しい相手に対して日本語と同様に断る側のフェイスと「直接的断り」を主に組み合わせ、「可能表現」、「常体」の言語形式を多く使用している。一方、親しくない相手に対しては、相手のフェイスと「直接的断り」が組み合わせられることが多く、「ちょっと」、「そうだ」、「丁寧語」「けど」、「終助詞」の言語使用が多い。つまり、断る側のフェイスを配慮した「直接的断り」の「わきまへのポライトネス」としては「可能表現」が、相手のフェイスを配慮する場合は「丁寧語」、「けど」、「終助詞」を用いるという相関関係が見られる。

ここでは特に「丁寧語」、「けど」に注目したい。権(2009)では、負担になる「年上の人」に対して断る側のフェイスに働きかける「間接的断り」と「直接的断り」が主に組み合わせられ、「断り」を遂行していた。この時「直接的断り」には「丁寧語」、「そうだ」、「けど」が用いられ、とりわけ「そうだ」、「けど」は「断る側のpositive face」に影響を受けたものであったと述べている。

そして、今回親しくないグループに対する「直接的断り」では、相手のフェイスと関連が深く、「丁寧語」、「けど」、「終助詞」の「わきまへのポライトネス」が主に使用されていることが見られる。

これは「丁寧語」、「けど」がpositive faceと組み合わせる際に用いられる「わきまへのポライトネス」のパターンであるのかもしれない。

例8) 親しくない先輩の「お金の貸し借り」－親しくない後輩の「断り」

H : 저기 미안한데 지금 회비를 내야 하거든, 오만원정도 있으면 좀 빌려주지 않을까?

(あのう、悪いんだけど、今会費を払わなければいけないから、5万円ぐらいあれば、ちょっと貸してくれない?)

K : . . . 아이 죄송한데. . . 저도 지금 여유가 안되서 좀 힘들 것 같은데요.

(「感嘆詞」 + 「謝罪」 + 「理由」 + 「直接的断り」)

(. . . アイ、悪いんですけど、. . . 私も今余裕がなくてちょっと厳しそうですけど。)

例9) 親しくない先輩の「お金の貸し借り」-親しくない後輩の「断り」

H: 저기 미안한데 지금 회비를 내야 하는데, 오만원정도 있으면 좀 빌려주지 않을까?

(あのう、悪いんだけど、今会費を払わなければいけないから、5万円ぐらいあれば、ちょっと貸してくれない?)

K: . . . 아~, 안~될~것~같은데요. 죄송합니다~.

(「感嘆詞」+「直接的断り」+「謝罪」)

(. . . 아~, できなそうですけど。すみません~。)

韓国語では「親しくない」+「年上の人」から要求される場合、特に相手のpositive faceを念頭においた「間接的断り」と「直接的断り」を多く組み合わせている。この場合「謝罪」を用いて相手(親しくない年上の人)のフェイスを立てながら、断る側のnegative faceを守る「直接的断り」を使用している。つまり、相手のpositive faceを配慮した「間接的断り」と共に表す「直接的断り」には「そうだ」、「けど」の「わかまえのポライトネス」によって、断る側の不可能な状態を断定的ではなく、相手に分かってもらおうとする配慮が見られる。これは断る側のpositive faceに働きかける場合も同様であり、韓国語でのpositive faceに働きかける「間接的断り」と「直接的断り」における「わかまえのポライトネス」の相関関係が定型化していることが言えよう。

5. まとめ

「間接的断り」を中心に考察されている「断り」表現の先行研究と異なって、今回「断り」の意を直接的に表す「直接的断り」について、「親疎関係」を軸に、日・韓両言語の相違点を研究し、権(2009)の「年齢差」を軸にした場合の「直接的断り」とも比較した。

その結果、以下のようなことが明らかになった。

- ① 日本語では「親しくない人」から感じる負担度は、「年下の人」から感じる負担度より一層重く感じて気を配るために、「直接的断りのみ」に使用する「やわらかい表現(配慮表現)」を複数組み合わせて表現することが分かる。
- ② 日本語では、親しい相手に対して「直接的断り」を断る側のフェイスに働きかける場合に、「~+「直接的断り」」の組み合わせを多く用い、親しくない相手に対して相手のフェイスと組み合わせているという共通点がある。
- ③ 「直接的断り」の組み合わせ方においては、「~+「直接的断り」」の組み合わせ以外

で両言語に異なる使用頻度が現れ、特に韓国語では、「年齢差」の変数の場合でも見られたように「直接的断り」+～」の組み合わせの使用頻度が低い。

- ④ 日本語での「のだ」は「断る側のpositive face」と組み合わせられる際に現れ、韓国語での「丁寧語」、「けど」はpositive faceと組み合わせられる際に用いられるという「わきまへのポライトネス」のパターンが現れている。

今後、依頼者との諸関係である「親疎関係」、「年齢差」、「依頼内容の軽重」の各変数によって現れる「直接的断り」を総合的に分析していきたい。

<参考文献>

- 生田少子 (1997) 「ポライトネスの理論」『言語』第26巻6号 大修館書店 pp.66-71.
- 李 宗和 (2006) 「ポライトネスからみた省略表現の意味 -『が』と『만』『네』を中心に-」『日語日文学』第30号 大韓日語日文学会 pp.55-76.
- 井出祥子 (1992) 「日本人のウチ・ソト認知とわきまへの言語使用」『言語』第21巻12号 大修館書店 pp.42-53.
- 井出祥子・萩野綱男・川崎晶子・生田少子 (1986) 『日本人とアメリカ人の敬語行動 -大学生の場合-』南雲堂.
- 任 炫樹 (2003) 「日韓両言語における断りのストラテジー -言語表現の違いとストラテジー・シフトを中心に-」『ことば』第24号 現代日本語研究会 pp.60-77.
- 元 智恩 (2003) 「断わる場面における「ノダ」文と「것 같다」(geos gata) 文について -それらのつかない文との印象比較-」『社会言語科学特集：コミュニケーションの社会言語科学』第6巻1号 社会言語科学会 pp.153-162.
- 元 智恩 (2005) 「日韓の断りの言語行動の対照研究：ポライトネスの観点から」筑波大学大学院博士学位論文.
- 宇佐美まゆみ (1993) 「談話レベルから見た “politeness” - “Politeness - “Politeness theory” の普遍理論確立のために-」『ことば』第14巻12号 現代日本語研究会 pp.20-29.
- 宇佐美まゆみ (2002) 「ポライトネス理論の展開(1)-(12) (連載)『言語』第31巻1-12号 大修館書店.
- 魚 秀禎 (2008) 「韓日の大学生の待遇表現に見られる男女差」『日本語文学』第41号 日本語文学会 pp.83-100.
- 金 玉任・鄭 好善 (2006) 「終助詞『ね』とポライトネス」『日本学報』第67号 韓国日本学会 pp.13-28.
- 権 英秀 (2007a) 「日・韓両言語の初出マーカー」『日本学報』第70号 韓国日本学会 pp.13-24.
- _____ (2007b) 「日本人の大学生と高校生の『断り』表現 -年齢層の差によるポライトネスを中心に-」『日本語文学』第34集 大韓日語日文学会 pp.87-104.
- _____ (2008a) 「日本人学生における「断り」表現 -大学生と高校生のフェイス複合現象から-」『日語日学』第37号 大韓日語日文学会 pp.5-22.
- _____ (2008b) 「日・韓両言語の「断り」・シフト -大学生を対象に-」『ことばとくらし』第20号 新潟県ことばの会 pp.横1-20.
- _____ (2008c) 「フェイス複合現象からみた「断り」表現 -日・韓両大学生を対象に-」『日本学報』

- 第77号 韓国日本学会 pp.1-13.
 _____ (2009) 「断り表現における直接的断りの位置づけ—日・韓両言語を対象に—」『ことばとくらし』
 第21号 新潟県ことばの会 pp.1-10.
- 崔 平 (2002) 「中国人と日本人の『断り表現』の相違について—依頼される場面をめぐる—」『日本語
 教育と異文化理解』創刊号 愛知教育大学国際教育学会 pp.10-18.
- 桜井恵子・斉藤麻子 (2007) 「OPIのロールプレイに見る韓国人日本語学習者の断り方」『日本学報』第
 72号 韓国日本学会 pp.71-84.
- 渋谷勝己 (1993) 「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』第33号第1分冊 大阪大学 pp.1-
 262.
- 曹 再京 (2000) 「終助詞『よ』の機能」『言語科学論集』第4号 東北大学大学院文学研究科 pp.1-12.
- 野田春美 (1997) 『日本語研究叢書9の(だ)の機能』くろしお出版.
- 三宅和子 (1994) 「日本人の言語行動パターン—ウチ・ソト・ヨソー意識」『筑波大学留学生センター日
 本語教育論集』第9号 筑波大学留学生センター pp.29-39.
- 三宅知宏 (1999) 「モダリティとポライトネス」『言語』第28巻6号 大修館書店 pp.64-69.
- メイナード, K, 泉子 (2004) 『談話言語学—日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラ
 テジーの研究—』くろしお出版.
- 森山卓郎 (1990) 「『断り』の方略—対人関係調節とコミュニケーション—」『言語』第19巻8 大修館書店
 pp.59-66.
- 山岡政紀 (2004a) 「日本語における配慮表現研究の現状」『日本語日本文学』第14号 創価大学 pp.17-39.
- Beebe, Takahashi & Uliss-Weltz (1990) “Pragmatic Transfer in Refusals.” in R. C. Scarcella, E.
 Anderson & S. C. Krashen (eds.), *Developing Communicative Competence in a Second Language*.
 NewYork : pp.55-73, Newbury House Publishers.
- Brown, P. & S. C. Levinson (1987) . *Politeness*. Cambridge University Press.
- Fraser, B. & W. Nolen (1981) “The association of deference with linguistic form,” in *International
 Journal of Sociology of Language* 27. pp.93-111.
- Goffman, E. (1976) “Replies and Responses.” *Language in Society*. Vol.5 pp.257-313, Cambridge
 University Press.
- Matsumoto, Y. (1988) “Reexamination of the universality of face: Politeness Phenomena in Japanese,”
 in *Journal of Pragmatics* 12. pp.403-426.
- Miriam E. & Bodman, J. (1993) “Expressing Gratitude in American English” *English Teaching* 49. pp.221-
 225
- Searle, J. R. (1969) *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge
 University Press. (J. R. サール著 坂本百大・土屋俊訳 (1986) 『言語行為-言語哲学への試論』勁草書
 房)
- 이 한규 (2001) 「‘-것 같-’의 화용 의미」『텍스트언어학』10 한국텍스트언어학회 pp.269-291.
- 전 나영 (1999) 「{-나 보다/-르 모양이다/-르 것 같다/-르 것이다/-겠다}의 의미기능」『말』
 23 (24) 연세대학교 언어연구교육원 한국어학당 pp.169-185.
- 辞典
 『朝鮮語大辞典—上巻』(1985) 大阪外国語大学朝鮮語研究室 (編) 角川書店.

注

- 1 Searle(1969)は、発話行為とは人間におけるコミュニケーションの最小単位であり、言葉話すこと、陳述、命令、質問、約束、依頼などの発話行為を遂行することに一致すると述べている。
- 2 他の人から邪魔されたくない、抑えつけられたくない、行動を自由に選択したいといった欲求。
- 3 台詞は各例を参照されたい。
- 4 三宅(1994) p.31、「ウチ：家族やごく親しい人々」「ソト：親しくないが自己やウチと関連がある人々」「ヨソ：自己やウチと関係がない人々」。今回はウチとソトに絞って対照する。
- 5 日本語と韓国語が話せる人に「日本語と韓国語の正しい文字化、韓国語の正しい日本語訳、適切な分類」であるか、そしてミスや問題点はあるかを確認してもらった。
- 6 Goffman(1976:5)“An image of self delineated in terms of approved social attributes”と定義しており、フェイスとは、よりとされている社会的特性によって描かれている自画像であるが、自分を見栄え良くすることでその職業や宗教社会をよく見せるときのように、他者と共有していることもある。(Thomas, 1995:184)、B&Lが定義した「フェイス (face)」の概念は、各文化における「面目」、「面子」、「顔」などの固有の概念と混同・誤解されているので、ここでは「フェイス」に表記する。しかし、下位分類のpositive faceとnegative faceは英語で表記する。
- 7 井出(1992：50)は、それぞれの社会の規範に則って行動することが円滑なコミュニケーションのために必要であるという言語使用原理であるとする。さらに話し手は自分と場面を社会の規範に照らしてわきまえ、それにふさわしい言語表現を選択すると言う。
- 8 生田(1997)、山岡(2003)、金・鄭(2006)は、ある発話行為に際して、相手との対人関係をなるべく良好にたもつために用いられる言語表現であると述べ、広義のポライトネスと違う「わきまのポライトネス」を提示している。配慮表現には「丁寧語、待遇表現、敬意表現」が含まれる。
- 9 モダリティがない文章を示す。
- 10 三宅(1999：68)は、モダリティはあくまで「文」の意味成分であるが、文の意味を最終的に決定するというその性格上、「発話文」の表現効果への入力となるものである。そのためにモダリティ部の背景は、ポライトネスの対話における表現効果の分析とも関係を少なからず持つことになると言い、メイナード(2004：32-33)は、「のだ」の言語操作は、出来事をそのまま現象文的に捉えるのではなく、全体を包括する概念として見直し、それについての思いを表現することになり、コメントする話し手として、つまり表現のモダリティの主として、語る自分を語るという言語操作を引き受けているという。
- 11 本論文のデータに現れた表現をもとに分類した。
- 12 例は今回調査した事例である。
- 13 日本語の「のだ」に対応する韓国語の文末表現には、さまざまな種類が挙げられる。それは「のだ」という表現の持つ機能が多いからではなかろうか。本稿では、相手に「断り」の意を伝えるために使用される「のだ」が、「直接的断り」の中で、主に「断り」の意を相手に説明するために使用されると考えた。今回、韓国語のデータの中で「直接的断り」に「のだ」に似た機能を果たしている表現として韓国語の「ㄹ」が見られた。「ㄹ」は、そもそも話し手の意思や推測の際に使用される表現である。また、話し手の意思や推測を表す機能において婉曲的に説明する際にも用いられている。朝鮮語大辞(1985：152)によると、「『わかる』、『知っている』の意の動詞とともに、あるいは論文などでよく使われ) 断定をさける婉曲を表す」機能があるとされる。さらに、「客観的事実においてではなく話者にとって未確認の、確実でないと思われる事柄について断定を避けようとする意識が働いている」とされている。例えば、“잘 모르겠습니다 (よく分らないんです)”のように、話し手がある物事について「分らない」という話し手の意を相手に伝える場合に、「ㄹ」と言う表現を使用し、相手に説明をやわらかく伝えているのである。したがって、本論文では、元(2003、2005)の考察(「のだ」と「そうだ」

の比較)に従わず、「のだ」と「ㄷ」を同じ意味的機能を持つものとして扱う。

- 14 元(2003)は「わきまえのポライトネス」を測るために、日本語の「ノダ」と韓国語の「것 같다 (geos gata)」を主な対象にしているが、本論文では「ノダ」と「것 같다 (geos gata)」の前後にくる副詞や終助詞まで研究の対象を広げて分析する。
- 15 今回「～そうだ」は日本語では現れなかった。
- 16 桜井・斉藤(2007:80)は、「～と思います」や終助詞、じゃん/じゃない、そして緩衝語句である「ちょっと」、マーカー(え～、あの～、う～ん、えええっ等)等は、断定的な「断り」を回避し、衝撃を和らげる働きをすると説明している。
- 17 今回「～と思う」は韓国語では現れなかった。
- 18 李(2006)は、国立国語研究所(1951)と坂田(1981)の「が」の意味用法から、「が」ははっきり言うことをはばかり、言いさしにする働きがあるとあげている(pp.56-57)。さらに「情報提供の請求」、「許可の求め」、「確認」、「意志・感情の伝達」の機能面もあると説明している。
- 19 金・鄭(2006:13)は、基本的に話し手が聞き手に対してとる態度を反し分ける文法形式であると述べている。曹(2001:1)は、「よ」は話し手の感情的な態度の側面の表現として捉えている。
- 20 「断り」表現には「断り」の意を直接的伝える「直接的断り」が単独で表れる場合がある。しかし、先行研究では「直接的断りのみ」の研究はなされていない。金・鄭(2006:13)は、基本的に話し手が聞き手に対してとる態度を反し分ける文法形式であると述べている。曹(2001:1)は、「よ」は話し手の感情的な態度の側面の表現として捉えている。
- 21 断り表現の中に、「断り」の意が現れる部分以外の感嘆詞、笑い、呼称を示す。
- 22 各「直接的断り」÷総「直接的断り」によって「直接的断りのみ」の使用頻度を示す。
- 23 今回韓国語では顕著な差が表れていないが、使用頻度の傾向は親しくないグループに多く見られている。今後データ数を増やす必要があるところである。
- 24 日・韓の大学生の待遇表現の場合でも、日本人の聞き手の丁寧度は、「ウチ」の聞き手の丁寧度は「ソト」のそれよりはるかに低いと指摘されている(魚2008:83)。
- 25 森山(1990:62)は親しい人に対して嫌型(「直接的断り」)を多く使用する理由として、対人関係において誠実であるべきである「誠実原則」と断りたい意向を率直にいう「率直表示の方略」に準じたからだと述べている。
- 26 各行に複数のしるし(*)がある場合、組み合わせを表す。
- 27 魚(2008:91)においても、日本人大学生の待遇表現における丁寧度は、地位の上下関係(年齢の差)より親疎関係の方を重視していると述べている。
- 28 魚(2008:94)においても、韓人大学生の待遇表現における丁寧度は、地位の上下関係(年齢の差)より親疎関係の方を重視していると述べている。
- 29 ～+「直接的断り」:「直接的断り」が文章の最後に来る場合、～+「直接的断り」+～:「直接的断り」の前後にフェイス複合現象が現れる場合、「直接的断り」+～:「直接的断り」が文章の最初にくる場合。
- 30 括弧の中に書いてあるものは「意味公式」である。意味公式とは、Beebe et al.(1990)によって提議された「断り」をより細かく分類した「断り」ストラテジーである。つまり、1つの「断り」の中に現れる「断り」を構成する構成要素(ストラテジー)である。